



東京の面白さを味わったのは大学時代でした。武蔵野市の自宅から当時は駿河台(千代田区)にあった中央大まで、中央線で通学していました。その頃は東京がオリンピック開催に向けて大きく変わりつつあった。右肩上がりの経済状況も相まって、世の中に明るい雰囲気が漂っていましたし、東京は個性ある人たちが続々と集まる街でしたね。

高校時代に映画の世界にはまってしまい、大学入学後に千駄ヶ谷(渋谷区)の俳優養成学校に入りました。すると映画のエキストラ出演のアルバイトが舞い込み、調布市の大泉(練馬区)の東映など、映画会社の撮影所に通いました。

ある日、調布の大食堂で昼食を取っていると、数人の取り巻きを連れた男性が僕の近くに座ったんです。石原裕次郎さんでした。裕ちゃんはカレーライスの大盛りを注文する

僕が、簡易宿泊所などが並ぶ通り「ドヤ街」にある立ち飲み屋

個性的だったのはスターだけではありません。僕がちょっと足を運んだところではあります。でも最近の東京はどうでしょうか。そのような場所もなくなりました。山谷が有名ですが、それ以外にもありました。何かの映画の場面を見て興味を持ったのですが、その開放的な空気がすっかり気に入り、各地を訪れるようになりました。

急ピッチで開発が進む東京には、建設業関係の仕事に従事する日雇いの人々が全国から集まっています。景気もよかつたら、そうした酒場も労働者でごった返し、にぎやかだった。僕はたいてい1人なのですが、作業着姿の陽気なおじさんが「兄ちゃん、学生さんかい? 一緒にどうや」と声をかけてきて、一杯、また一杯と、酌み交わしたことなどもたびたび。また、九州から出てきたというおじさんが「月が出た出た」なんて炭坑節を歌い出すこともあります。全く知らない人同士でもすぐに仲良くなり、身の上話をしたりもしましたね。

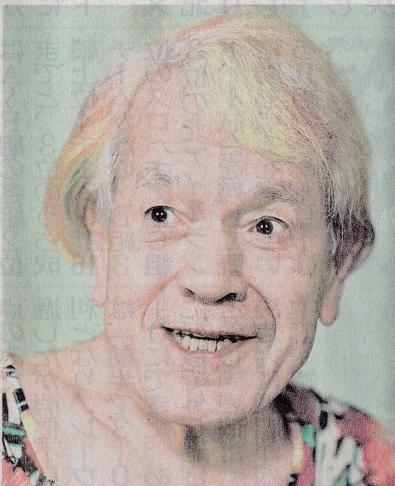
大学の授業にはあまり出席しなかったけれど、酒場が社会勉強の場でした。2年留年してやっと卒業し、その後は20以上の職を転々としました。でも「なんとかなるさ」と絶望せず、最終的に作家で食べていけるようになつたのは、酒場でいろんな人に会つたことが肥やしになっていると思います。

「ドヤ街」の酒場は、さまざまな人々が集まって混沌とした雰囲気も残っていましたが、そこで個性がぶつかって新しい文化や価値観が生まれていた。東京はそういう長所を持っていたと思うのです。



志茂田景樹さん

作家



しもだ・かげき

1940年、静岡県生まれ。探偵社、保険の調査員など20以上の職業を経験。80年「黄色い牙」で直木賞受賞。近年は子どもへの絵本の読み聞かせ運動に取り組んでいる。

酒場の混沌が学びの場

こ近年、線路の高架化と駅前再開発が進み、街の個性が失われてしまいました。どの駅に降りても同じような居酒屋チェーン店があつたり。個性が失われる面白みに欠けるし、なんだか心まで閉塞感に覆われているよう気さえします。

たし、街の景色も均一化しました。庶民の心の余裕も次第に失われているようです。

僕は今もJR中央線沿線に住んでいます。残念なことに、このバラエティ番組によく出演

しました。お茶の間からは「変な人だな」と思っていたようですが、あの時代の東京が僕の個性を育ててくれたと感じます。混沌とした開放感が時々とても恋しくなります。

2020年の東京五輪はそう遠くない未来ですが、かつて東京にあった個性を大事にする雰囲気がもう一度広がっていくといいですね。【聞き手・江畠佳明、写真・猪飼健史】